
ラブカクテルス その68

風 雷人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ラブカクテルス その68

【Nコード】

N4475E

【作者名】

風 雷人

【あらすじ】

今宵は少し苦いカクテルをご用意しました。なかなか効きます。ご賞味あれ。

いらっしやいませ。

どうぞこちらへ。

本日はいかがなさいますか？

甘い香りのバイオレットフィズ？

それとも、危険な香りのテキーラサンライズ？

はたまた、大人の香りのマティーニ？

わかりました。本日のスペシャルですね。

少々お待ちください。

本日のカクテルの名前は流行り病でございます。

ごゆっくりどうぞ。

僕は腹を抱えた。

イーツタタ。痛い。なんだろう、この痛み。

腹はゴロゴロと、いや、カンカン、コンコンと妙な音を出している。ここ最近、食欲がある時ない時が激しく入れ替わり、調子がよくない。しかも腸も下痢と便秘を交互に繰り返し、痛みを伴ったり、なかつたり、と落ち着きがない。

一週間ほどは市販の薬を飲んで様子を見ていたが、どうやら良知が明かないらしい。

仕方なく僕は仕事を休み、しぶしぶ病院へ行くことにした。待合室に入ると直ぐに、あの嫌な消毒液の匂いが鼻を突く。いつ来てもこの匂いに慣れないのはどうしてだろう。

僕はそんな事を気にしながら受付を済ませ、またキリキリ、カンカン、コンコンと唸り始めた腹を擦った。

やっこの事で呼び出しを受けたのは、それから一時間弱の長い時間を待たされた後の事だった。

その間にも僕の腹は何度とない波の様な緩やかな繰り返して、痛みを強弱で訴えてきて苦しみながら、トイレに行くべきか、でもその間に呼ばれたならどうしよう。また呼ばれるまでに時間が掛かるかも知れないなどの、モジモジソワソワのしどろしどろだった。しかし不思議な事に、いざ僕がお医者さんの前に腰を下ろすと、腹は嘘のようにその痛みと落ち着きを取り戻した。

僕は抱えていた腹を覗くように見て、病状を聞かれながら、さつきまでの腹の具合を、あれ？といった表情で話した。

するとそんな様子の僕を診ながら、腹に聴診器を当てるお医者さんは、僕に驚くべき病名を告げてきた。

それはなんと十二指腸宴会だと言ったのだ。

この頃の現代病の中では、最近はずきりと病名付けされた新種の病気で、恐ろしく感染率が高いウイルスが原因のものだった。

ちまたで流行っているとは聞いていたが、まさか僕にも感染していたとは。

医者はショックを受けている僕に、この病気についてどれだけ知識があるかを聞いてきた。

僕はテレビなどのニュースで多少情報を耳にした程度だと言うと、それならばと、詳しい説明をしてくれた。

十二指腸宴会は、悪性のウイルスが体内に入り込み、それが内臓の十二指腸をそそのかして、宴会を始めさせるといった症状を引き起こす、言わば、愉快犯といったところだ。

十二指腸は、普段の生活が不規則で、しかもいつもの食生活におけるの食事のバランスが、悪ければ悪い程その挑発、いや、誘惑、いやいや感染されやすいのが特徴だそう。

一旦、十二指腸達が開き直って、病状が発病しだすと、彼らは自分達の役割を適当にやりだし、末期になると全くといっていいほどや

る気を無くし、機能を止めてしまい、最悪の場合、死に至るケースもあると言った。

僕は背筋がゾツとするのを憶えた。

そして今の病気の進行状況は、と、僕の腹に当てたままの聴診器をお医者さんは、僕の耳にはめて、ちよつと訊いてみるように進めてきた。

僕は恐る恐るそれを耳にすると、何やら小さな声が喋っているのが聞き取れた。

さあさあ皆やってくれ！酒は安い発泡酒しか流れてきやしないし、つまみは高カロリーに塩分、糖分がたっぷり。しかも安物の冷凍物、ファーストフード、インスタント、菓子。どれを取っても栄養はないが、皆で騒ぐには十分だ。遠慮しないでやってくれ！

僕は耳を疑った。

確かに仕事の忙しさにかまけて、安くて早くてうまい物ばかり気にして食事をし、気晴らしの酒もこの頃毎晩だった。

僕は自分自身を深々と反省しながら、もう少し聴診器の声に耳を貸すと盛り上がり始めた宴会に油を注ぐ文句が聞こえた。

そうそうそうですよ。

この人は皆さんの事なんてこれっぽっちも労る気もないし、きっとこの先だってロクなことになりやしません。

ググツとイツちゃえばいいんですって！

パーツとイキましょーう！

はっはーん、この脳天気なのが流行りのウイルスだな。

僕はお医者さんに、このウイルスを締め出すにはどうすればいいかを聞いた。

するとお医者さんは、太っぴ注射を取り出し、それをしりっぺたに

射てばイチコロだと言った。

しかし僕は怖じ気づいた。

何しろその注射の大きさと言ったら、お医者さんが一人では持てず
に、看護婦のおばさまと二人で、やっとのことで持ち上げられるほ
どだった。

そして早く治すならこれしか今は手がないが、どうする？とお医者
さんは僕に迫り、そんな物を目の前にした僕は足を震わせながらも、
あの宴会に終止符を討つべく、頷くしかなかった。

お医者さんは、それを見ると僕と同じように頷き、相槌を打った。
静かな沈黙が時間をもなくしているような空間。そこに異世界から
やってきたエイリアンのような叫び声が、その部屋、いやその廊下、
いやその病院全体に響き渡っていたに違いなかった。

俺はしばらくスランプになっていた。

何をするにも上手くいかずに、その内、体の調子も優れなくなっ
てきた。

なんだろう。寒気までしてくる。

いきなり襲ったこの具合の悪さに仕方なく、いやいやではあったが
病院に行ってみることにした。

あまり普段から病気などしない俺は、久しぶりに訪れた病院に、ま
ず煩わしさを感じた。

具合が悪くて来ているのに、事務的な手続きなどが多いし、まして
その後の待ち時間の憂鬱さと言ったら、全くイライラを募らせる原
因になり、しまいには俺は頭まで昇ってきた痛みにも、多分顔色までも
が悪くなっているのが判るほどだった。

やっと呼ばれて入った病室。

俺は思わずお医者さんを怒鳴って、さっきからのイライラをぶつけ
てしまったが、お医者さんはそれをキョトンとしながら、それはそ
れはすまなかつたねと、何の感情も表情に浮かべずに、サラッと流

して椅子に腰掛けるように促してきた。

俺はその態度にシラケを感じ、上がった感情をバカらしくなって落ち着かせ、それに従い、しかし顔は膨れ面のままで不服を隠せずにいたのだった。

そんな様子を尻目にお医者さんは、俺に病状を聞いてきたので、ふてぶてしい態度のまま俺は、さっきまで感じていた具合の悪さを語ったが、不思議とその症状は今感じずに、俺は首を傾げた。違う事に気がいつてしまったせいだろうか？

しかしお医者さんは、そんな俺の胸に聴診器を当てて、こう言った。これは今流行りの自律神経出張症だと。

俺は目を丸くした。

最近、街でよく聞くこの病気は、かなりの悪性の夕チが悪いものだと、噂では知っていた。

まさか、俺がそれにかかっているなんて。

さっきの膨れた顔を、驚きの顔に変えた俺は、それについての詳しい話をビクビクしながら尋ねた。するとお医者さんは、

この病気は、ここ最近学会で取り上げられたマウスの実験から解った遺伝からくる病気の一つで、自分でも気付かぬうちに自律神経が、その過酷な神経伝達を繰り返し使われたためショートし、頭にきた結果、キレて身体から脱け出し、他の身体へと出張しに出掛けてしまう症状。

これにやられると、初期症状として倦怠感、頭痛、寒気、そしてそれらをもし感じなくなったら、お医者さんは言葉を濁し、もう出張に出掛け、留守になってしまったとしたら、身体は全ての神経系統を使えなくなり、最悪の場合は死に至ることも。と。

俺は身体を完全に固まらせてガチガチになった。

まずい。そう言われてみれば、さっきから痛みが急に治まってきている。

青ざめ、取り乱しそうな顔をした俺の様子を見たお医者さんは、聴診器を俺の首の付け根辺りに当てたまま、その先を俺の耳に掛けさ

せ、無言で自分でそれを聞いてみなさいと言った。
唾をゴクリと俺は飲み込むと、大きく息を吐いて、それに耳を集中させた。

全くやってられない。

何かって言うと直ぐにイライラして、こっちら何回火傷を負ってまで堪えてきたと思ってるんだ。

やめだやめだ、出張に出させてもらおう。

別に、大事にオイラを扱ってくれる、オイラを本当に必要としてくれる支店がある筈だ。

勝手に出て行くのはルール違反だが、仕方ない。

もうもたない。全然無理！

そこには悲痛な叫びにも似た愚痴が、俺の心をグサグサと射してきて、今までの自分の行いの悪さ、性格に任せた短気さを、悔い知らされる思いで、胸に手を当てた。

なんと言う事だ。俺はそんなに自律神経を圧迫、いや、追い詰めていたのか。

俺はうなだれ、床を見つめて涙を流した。

すると、お医者さんはそんな俺の肩を優しく叩き、顔を上げるように俺に促し、見上げたその表情は仏様のそれに見えた。

その姿の背後には、なぜか柔らかい光が輪を描いているような幻影が見えた気がして、俺は思わずため息を漏らしながら手を合わせた。お医者さんは優しい笑顔で頷き、俺の目の前に、それはそれは太い座薬を見せて、これで自律神経に考え治して、いや直してもらおうと、また、汚れない笑顔で俺に同意を求めてきて、当然俺にはそれを断るという選択が選べる訳がなく、歯を食いしばるしかなかった。悪魔が崇拜する暗黒の世界のようなその病室に、一つの光が挿したような、そんな一撃が俺の身体を通り抜けて貫通し、心に言い知れないありがたみの喜びを感じ、慈悲の祈りのような、安堵のため息

が、充滿して、生きた絶えた。
そう、俺は昇天したのだった。

いやいやしかし、この頃どんな病気でも治してしまうガスができ、それを浴びれば途端に具合がよくなるようになったのはいいが、そんなものを発表してしまったら、一般に出回り処方され、医者の出番がなくなる。

そこで医学者協会の考えた結果、その薬を使って病気を治している事を秘密にし、その代わりに精密コンピュータ内蔵の聴診器で患者の今の体をデータ化し、それによる判断から偽りの診断をして、最後に栄養剤や疲労回復剤などをサービスで投与してやる。

始めはわしも罪悪感から、そんな事をやるなんて反対だったが、必ずや行けば治る医者、と評判は上がる一方だし、最近増えている自分の管理もできない若者の意識を、健康に目を向けさせられるいい機会ともなり、結果的には良かったのかもしれない。

しかも最近まで時たま話題になっていた誤診などの医療ミス。それに加えて若い医者への教育問題などは、そのガスによる治療によつて全くなくなった。

だが、いつそんな事がバレるかは分からんが、医学者協会が定期的に発表している偽物の流行り病の話題のおかげで、世間の目と耳は興味の欲望に対して事欠かず、それらが注目されている内は誰も我々のそんな話さえ捜すことさえしないだろう。

しばらくは大丈夫だな。

やれやれ、しかし嘘も方便とはこの事か。

どうでもいいが忙しい。

おしまい。

いかがでしたか？

今日のオススメのカクテルの味は。

またのご来店、心よりお待ちしております。では。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4475e/>

ラブカクテルス その68

2010年11月4日01時42分発行